

《資料紹介》

蕪村「おちこち」句寸釈

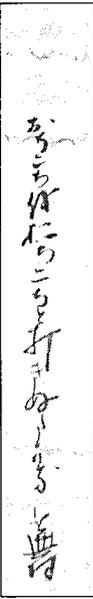
— 架蔵『短冊帳』自筆

短冊の本文から —

山岡

あきら
照

昭和五十七年秋、広島市の古書展で一冊の短冊帳を入手した。表紙寸法は縦三九・五cm横一八・〇cm、折本仕立て。題簽その他、書名を示す記述は見当たらない。各面二葉、計百葉（表五〇、裏五〇）の短冊を収める。各短冊は料紙紙型、筆跡が異なり、それぞれ句と俳号が記されている。蕪村・月居・一具・松嶋十湖など、江戸中期から近代にいたる俳人の句を取め、筆跡の確認できる諸資料を閲するからざり、おおよそ自筆短冊と認めてよいかと判断される。ここでは他資料とは異なる本文を記す数葉の内から、国語教室にもなじみの蕪村の短冊を取り上げ、紹介かたがた寸釈を試みたい。



架蔵短冊帳の表第一五面の第二葉（縦三六・五cm横五・五cm）である。本帳を入手した年の秋、広島御滞在中の暉峻康隆先生に見ていただいたところ、署名書風、字体等から

判断して自筆であろうとの御鑑定を頂戴した。

一句、「おちこちをおちこちと打きぬたかな」とある。この句の本文は、自筆句帳その他に「遠近おちこちと打きぬた哉」、落日庵句集その他に「おちこち くく とうつ衣かな」とあり、下五の「きぬた」「ころも」の異同が知られている。これは日本古典文学大系にいうとおり、「きぬた」がよからうが、この短冊帳は、あらたに上五について、「おちこちを」と格助詞「を」のある異文の存在を教えることになる。しかも蕪村自筆の短冊本文としてである。

大系頭注は、上五「遠近」（自筆句帳は「おちこち」をミセケチにして傍書）に「距離と同時に遠く近く聞こえる砧の音の響きをあらわす」と記す。とすれば、「遠近おちこち」とは、上五からさらに砧の音の響きを取り立てて強調し「打きぬたかな」に続けたものとみられよう。このような上五に格助詞を加えて「おちこちを」とするのが、わが短冊帳の本文。句柄はどう変化するだろう。

周知のとおり、この句の材「砧」は晩秋の風物。「風寒み我が唐衣打つ時ぞ秋の下葉も色まさりける」（拾遺集・卷三・秋・一八七・延喜御時の御屏風に・貫之）などの和歌にも詠まれ、後拾遺集以後は勅撰集秋部の主題の一つとして定着する。冬支度する晩秋の季節感を表す歌語だが、中国漢詩文の世界で、「誰家思婦秋掃帛、月苦風凄砧杵悲、八月九月正長夜、千声万声無了時……」（白居易「聞夜砧」、和漢朗詠集・秋・掃衣）のように、北辺にある夫を思い遣り

つづ夫に送る衣を砧で打つ女性の姿が描かれるところから、
△待つ女△の主題と結びついて詠まれることが多い。

たがためにいかに打てばか唐衣千度八千度声のうらむ
る (千載集・巻五・秋下・三四〇・搗衣・藤原基俊)

砧、また衣を搗つといった語や表現にまとう、こうした恋
の風情は、俳諧の世界でも受け継がれている。

砧打ちて我に聞かせよ坊が妻(芭蕉・甲子吟行)

旅のさびしい夜、僧坊の女に砧の音を乞うて憂愁の気分を
さらに募らせようとする芭蕉。砧の音を風情の道具として
奉仕させようとするところに、風狂の境位や俳諧味を読み
取ってよいのだろうか、ことほどさように、砧は△待つ女△
の情景と結んで文芸世界に根付いていたのである。それには
もちろん謡曲「砧」影響もあつたに違いない。

さて、このような句材「砧」の周辺を復習した後、一句
の寸積にすすむ前に、もう一本補助線を引いておこう。

千たびうつ砧の音に夢さめて物思ふ袖の露ぞくだくる

(新古今集・巻五・秋下・四八四・搗衣の心を・式子内親王)
ここに明確なのは砧の音を聞く詠者の姿である。オチコチオ
チコチと響く音が聞く者の「物思ふ」心を打って、袖の涙がく
だけるといふ。この一首に限らず、「搗衣」の歌には、砧の音
に搗つ女の心情を思いやるものほか、その音が詠者の「物思
ふ」心に響いて、との詠も多い。

唐衣長き夜すがら打つ声にわれさへ寝でも明かしつるか
な(後拾遺集・巻五・秋下・搗衣・中納言資綱)

砧はこうして、衣を搗つ情景を描き出し、搗つ者の心と聞く者
の心を表現する素材としてあつたのである。

おちこち　おちこちとうつ　きぬたかな
おちこちを　おちこちとうつ　きぬたかな

この補助線を引いて、一句を較べ読むと、前者が「遠く近く聞
こえる砧の音の響きをあらわす」のにとどまるのに対し、後者
が、「遠く近く聞こえる砧の音の響き」とともに、その音が遠
く近く砧の音を聞く者の「物思ふ」心を打つさまをも詠み出し
たものとなるのがわかる。聞く者の一人には、もちろん蕪村も
含まれていよう。

うき我に砧うて今は又止みね(句稿屏風)

憂いのなかにある蕪村は「砧うて」と呼びかけ、しかしまもな
く「今は又止みね」と命ずる。その間の心の交転の身身はいま
聞わないが、蕪村が砧の音に「物思ふ」心を打たれた人であつ
たことは確かだろう。

以上、オチコチの音感に重きをおいて解釈されてきた一
句が、「を」の出現でどうかかわるのかを考えた。「おちこち
：」「おちこちを：」、どちらが蕪村の句としてふさわしいの
か、それはその道の識者の判断にゆだねよう。一句は俳諧新選
の「雑部檀林体」に収められる。談林風としては前者句体がよ
ろしかろうが、自筆短冊に見る上五の異文は、蕪村にまた別の
句表現があつたことを考えさせる。

架蔵短冊帳には本文上問題になる句がいます少しある。また
機会を見つけて紹介したい。